# 永井先生の学問に思う

川野洋

永井先生が亡くなられてから早２年の歳月がたつ。先生の精進された学究の道は広く重く、そしてその残された問題もその深い含蓄をもって未完のまま、開いた扉を我々後輩にさらけ出して下さっていられるように思える。それ程先生の科学哲学探求の道は深刻かつしんどかったのではなかろうか。学究道というものは若い頃のエネルギッシュな喜びもさることながら、その道の深まりとともに次第に悲劇的色彩というか情感を帯びてくるようだ。先生の静かな神式のご葬儀の場に侍り私はそのような先生の一生というものを偲ばせていただくことであった。

思えば先生と交友がえられるようになったのは 1960 年代の初頭、当時科学論理学会、科学基礎論学会それにアメリカ哲学研究会の三者共催による毎年開かれていた恒例の科学哲学大会においてであったと考えられる。当時論理実証主義の継承発展が科学哲学界の主流で、若き先生が颯爽とその論陣をはっていられた姿が今でも想いおこされる。そのうち先生に科学哲学界の活動に参加するようお勧めをうけ、1965 年の「造形シミュレーションの論理」の発表以来、先生との交流はだんだん密になっていったように思う。先生の科学哲学への論理主義の姿勢は大変強靭なものであられたように覚えるが、この永井哲学はまた非常に広い視野をもっていたように思われる。私の専門分野である美学・芸術学の世界では、美や芸術を対象とする理論は殆どが日常言語で表現され、科学言語による取扱いを拒否する伝統があるが、私はこのような伝統に対し情報科学（情報理論と計算機科学）による美意識と芸術の分析および理論構成への新しいアプローチを試みていた。先生は私のこの計算美学に、御自分の科学哲学の論理を強化・拡張しようとする期待の一部をかけてくださったのではなかろうか。その後も著書や論文発表で随分と御声も御目もかけて頂くこととなる。

先生の学究人生は科学理論に始まり更には広く一般的な世界像に至るまでそれらの論理主義的表現と構築に全力を注がれたと言えよう。この道は R.Carnap によって典型的に追求され略完遂されたところと考えられる。しかしこの Carnap の道はその先まだ未完の部分を残していたらしい。Carnap の継承者であられた先生はこの師の未完の仕事を一番よく感じていられたはずである。先生は日頃よく言っておられた。「わしは Carnap がし残した所をやる。それは言語表現のプラグマティクスの形式化である。」プラグマティクスといえば Carnap がいわゆる「寛容の原理」により論理実証主義的物理主義で硬直化した科学理論の緩和と自由化を計ったところであったが、この「寛容」の理念の具体化を様相論理や確率統計を使って計っておられた（？）のではなかろうか。とに角、論理主義といえばその硬直性が目につき易いが、先生のそれは論理主義を貫きながら広く柔軟な寛容性をその中に秘めておられたものと私には思える。

ところが、以上の科学哲学研究における言語分析法を廻って、L.Wittgenstein を震源と

する日常言語学派なるものが台頭し、論理主義的科学言語表現の限界とそれの論理的還元主義への攻撃が激しさを加え、時流に敏感な若き研究者の多くはこの Wittgenstein ブームの方向へと転向していったという風に私には考えられる。科学哲学運動の中での「寛容の原理」による脱論理実証主義的諸々の研究は次第にというよりも急速にその力を弱めていく。「現象」と一言で言うけれど、観測データを表す感覚言語と所謂「クオリア」なる感覚質を表す感覚言語は同じ「感覚言語」の名をもつが、その内実は全く別物であることは Wittgenstein 派の言う通りであろう。両者は別世界の存在なのである。

従って科学言語の論理的還元先が後者のクオリア語であるとすれば当然そのような科学理論の構成は不可能となる。Wittgenstein 派による観測データとクオリアの Descartes 的切断は見事な指摘であった。そしてその結果は科学の世界と価値や詩の世界との平和共存であるべきであったろう。しかし幸か不幸かこの両者の平和共存は我が国では実現しなかったように思える。その原因は Carnap 派の侵略性にあるのか、それとも Wittgenstein 派の被害妄想にあるのか？私の想像はどうもその原因は後者の方にあるように思えるのだが。Descartes の物心切断のマニフェストは略々人類共通のコンセンサスとなっていよう。いかに唯物論者といえ神信心を心の奥に隠しもっているはずである。Carnap 然り、我が永井先生然りであったと私は思っている。これらの人々はただその心のニッチを秘匿し、語らないだけである。

しかしまた科学言語の語りうる論理的還元可能な世界（物自体から抽象された客観世界）は現象のどこまで及ぶのか、その限界のクオリアにどれだけ近づけるのかという問題は依然として残るであろう。追いつけない、前を行く亀に追いつこうと永遠に走るアキレスの悲劇的努力と迷いと苦悩を誰が笑えるであろう。このような極限への収束以前の無明の道程に挑戦するシジフォスの営みこそ我々科学（哲学）者の本懐と言うべきではなかろうか。永井先生という人間の中にそのような御姿が見てとれるように私には思える。

昔、先生は私に「あんたはこの世界をどのようなものと思う？」と問いかけられたことがある。勿論若輩だった私に答えようはなく、私の答えを期待してらっしゃった先生の失望と困惑の御顔が今でも目に浮ぶ。論理的還元内の世界について先生は現象＝実在の素朴実在論的世界観をもっておられたであろうが、美学研究者の私に還元のその先に残るかもしれぬもっと実在的な未知の世界について何か話をされたかったのではなかろうかと推察される。

学問とは無縁の話だが、先生の人間というものを暗示するエピソードについて語ろう。それは女性を廻る話である。ずっと昔になるが、ある時先生は若い女の子を連れてきて「この子の話に乗ってやってくれ」と仰有る。その娘は田舎から出てきたばかりの女優志願の子であった。その夢に燃えてる娘さん曰く。「舞台はいや、映画もいや、テレビ女優でないといや。」びっくりして「それはまたどういうこと？」と私が聞くと、夢見る彼女は自信に満ちて「舞台はせいぜい数十人、映画は数千人、しかしテレビだと数百万人が私をみてくれる。私はそういう多数の目に自分をみてもらいたいの！」とこう言うのだ。とんでもな

い新人類の娘を先生は何処からか拾って来られ一生懸命その夢みたいな話に身を入れておられる。これには私も閉口した。

私は秘かに忖度するのだが、かのファウスト博士のように先生の衷にも女性の生産的魔性、「永遠に女性的なるもの」への憧憬のようなものが何かおありになったのではなかろうかと、先生の科学哲学の堅固な論理的構築性からみて逆説的に思うものである。

苦難の先生の科学哲学は永井学派の後継者達によって今後どのような道をたどるのであろうか。科学理論の論理的高楼の還元元である観測データには限界があるであろうが、それへの接近は無限の道程があろう。永井哲学はプラグマティクス論理によるそれの突破を計ったと私には思える。Quine も観測データの限界に挑戦し、非観測データの唯名論的くりこみによる科学理論の動的拡大・縮小というプラグマティズムと相対主義を掲げて科学哲学硬直化の危機に対応しようとした。しかし Carnap 学派の先生の立場は Quine と違って実在論的志向の方がより強かったのではなかろうか。

科学理論をプラグマティックな交通案内図として唯名論的に把えるか、実在の表現として実在論的に把えるかは科学哲学の大問題であろうが、私は先生の立場を後者と感じる。最近の量子論の Aspect の遅延選択実験では超光速観測のデータがえられ、また素粒子論の対称性を廻る議論では核融合における原対称性の自発的破れの理論の登場が見られる。ここでは人間的観測を遙かに超えるデータと理論の出現が古典的科学にその理論そして哲学の改変を迫っている。所謂実在論の台頭である。

ここで私は「弁証法」というものが重要なキーとなっているように思う。遅延選択における時間の逆転する対称性の「自発的」「破れ」で現象世界（そして心と意識）が現われるという理は、物自体の自からなる自己否定と、脱自化した物自体の現象（客観）化を物語る。しかし永井先生（に限らず殆どの科学哲学者達）は残念ながら弁証法嫌いであられたように私には思われる。もし永井哲学に限界があったとするならば、現象主義の枠内で実在志向の科学哲学を目指された（？）ところにそれはあったのではなかろうか。ともあれ、永井先生は科学哲学のあるべき道を、時流に煩わされることなく只管に努力して進まれた。そしてその学びの道は大きな未解決の問題を残しながら、我々にそれを示しつつ先生はお逝きになった。巨星落つ。そして日暮れて道遠しの感や切――。

（東京都立科学技術大学名誉教授）